



Foreign Breeders
インタビュー・シリーズ vol.14

Bolognese

ボロニーズ・ブリーダー

フレデリカ・レンクビストさん &
ロッテン・レンクビストさん

ケンネル・ハンギー・ドリー、スウェーデン



ボロニーズという白い小型犬は、マルチーズの仲間。ほかにもビション・フリーゼ、コトン・ド・チュレアル、ローシェンがあり、これら地中海原産の白い愛玩犬は、「ビション・ファミリー」と呼ばれている。「ビション」というのは、フランス語の「バービション（ひげという意味）」を省略した言葉だ。

マルチーズは、今や日本では定番の愛玩犬。そして、ビション・フリーゼはヨーロッパで大人気。しかし、ボロニーズは、まだまだ知名度が低い。白くてボヤボヤのコート、そしてつづらな丸い目。こんなに愛らしい犬を放っておいてもいいの？

そんなレア犬種の、シヨードッグとしてのクオリティーを高めたブリーダーがスウェーデンにいた。フレデリカ・レンクビストさんは、そのブリーディングによって、おそらくこの犬種史上初めて、「勝ちまくるシヨードッグ」を仕立てたのだ。原産国以外で、レアな犬種を磨きのかかった犬にするというのは、非常に難しいことだ。その課題を、どう克服してきたのか？

ボロニーズに限らず、「これから希少犬種を正しくブリーディングしたい」という人にも、フレデリカさんの経験は参考になるだろう。

イタリア原産だからファンになった？

藤田（以下F）…なぜボロニーズなのですか？

レンクビスト（以下R）…イタリアが好きだからよ！ 最近イタリア流行りじゃないですか。イタリアの食べものも大好き。

F…え……？

R…うそうそ（笑）！ いや、でも必ずしも冗談とも限らないのだけど……。まじめに話せば、こういうことなんです。私と犬とのつきあいは、もう40年近くになります。最初に飼ったのはラブラドル・レトリーパー。この犬種に非常に入れ込んでいたんですよ。でも1980年代に、ラブは完全

にフィールド系とショー系に分かれてしまつて。これで少し興味が冷めてしまつたんですね。機能の伴わないラブがショーリングに上がってくるのが、嫌になったのもあるわね。その後、いろんな犬種を飼いました。マリノワやジャーマン・シェパード・ドッグ、スムース・フォックステリアに、ボーダー・テリア。ほかは、ミニチュア・シュナウザーやカーリー・コートテッド・レトリーパー、そして今もいるのがラゴット・ロマンノロ（以下ラゴット）。

F…じゃあ、やっぱりイタリア好きっていうのは、本当なのですね！（ラゴットはイタリアの犬種）

R…やっぱりそうかしら。たくさん犬種を飼ってきたのは、20年間ショーのリン

グ・スチュワードをしながらいろんな犬を見てきて、「犬っていういろんな種類がいるんだなあ」と、そのバラエティーの豊かさにすごく魅せられたから。

F…だから、まったくタイプの違う、いろいろな犬種に興味が沸いてきたのですね。

R…そう。ボロニーズも、犬種への好奇心の延長上にあるっていうのかしら。こんな小さな愛玩犬を飼ったら、どんな感じなのかなって。ラブを飼っていたときは、猟犬の訓練をやったり、ワーキングの世界に随分のめりこんでいたんです。フィールド・テストのアシスタントもやっていたほど。けっこう硬派だったのよ。

F…ブリーダーの方には、同じ犬種ひとつじだったり、同じではなくても、だいたい系統の似たようなもので犬舎を固めていく人が多いですね。フレデリカさんのような方には、もしかして今までお会いしたことがないかもしれません。テリアにガンドッグ、牧羊犬、そして今は小型愛玩犬。FCIのグループのほとんどすべてを網羅していますね！

R…ラゴットは、もう10年近く前からブリーディングをしていたのだけど、イタリアのブリーダーと親しいので、どうしても目がイタリアにいくんです。それでどうせ小型愛玩犬を飼うならと、自然とイタリアの

犬種になったのかもしれませんが。

F…マルチーズに目がいかなかったのは？

R…未知のものにチャレンジしてみたかったんです。ボロニーズは、原産国のイタリアですらほとんどいない。ヨーロッパ全体を見回しても、やっぱり少ない。おまけに、スウェーデンのボロニーズは、ひどい個体ばかり。ブリーダーの誰もがスタンダードを理解していなくてね。「こりゃ、いっちゃ私がしゃやり出で、この犬種を救わなければ！」と、ある意味使命感のようなものに燃えていました。

スタンダードの正しい解釈

F…スウェーデンでは、どうスタンダード





を誤解していたのでしょうか？

R…まず、ボロニーズは長方形の体型じゃないんです。つまり、短足の胴長犬じゃないんです。正方形の体型が正しいんです。これは、「体高と体長が同じ長さ」という意味。それから、どうもコートのスタイルに対して間違った見解を持たれていることが多いんです。ビションミタいに、頭でかちな印象を与えようとしている人がいるわ。

F…それは、トリミングで、という意味ですか？ 生まれつきではなく。

R…ええ。ボロニーズは、頭部と胴のあいだがくびれてはいけません。頭部のコートは、自然に胴部へと統合していくもの。ハサミでトリミングしちゃいけないのね。技巧的ではなく、自然体のまま！それが、この犬種のトレードマークでもあるの。それから、ボロニーズのコートは縮れた

感じでなければいけない。なのに、それを一本一本ときほぐしてしまう人がいるんです。マルチズじゃないのに。あくまでも、このボヤボヤした毛が特徴です。シャンプーは週に1回で、乾かすのは自然乾燥がベスト。

もうひとつ大事なことは、ビションよりも、ちよつと目が大きめであること。でも、飛び出しているはいけません。

毛は一本一本をほぐさないようにして、毛がまとまってカールした状態を残してお

くことが大事です。

F…でも、きつと難しいのでしょうかね。多くのブリーダーにとって、「何がボロニーズの正しい姿なのか」ということが、こんなに頭数が少ないとわかりづらい……。こういった問題を、どう克服したのでしょうか？

R…幸いにも、コンタクトをたくさん持っていたんです。私の友人には、まずイタリアに詳しいリネー・S・ウイリスがいます（ラゴットをイタリアから最初にスウェーデンに導入した犬舎である「コビー」のオーナー。インターナショナルに活躍するショーの審査員として有名）。彼女にだいぶ助けられました。リネーを通して、イタリアのブリーダーからも情報をもらえるようになったんです。

F…フレデリカさんは、あつという間に「この犬種の何ぞや」というのを把握したようです。まだ繁殖を始めてそんなに長くはないはずですよ？

R…5年です。

F…スピード出世“ですね！ イヤー・オブ・ザ・ブリーダーのレースで20位以内についていたのは、2年前のことですか。こんな珍しい犬種のブリーダーが上位にくるなんてと、随分驚いたものです。

R…17位でした。私も、よくも短期間で



粒のそろった個体を出せたな、と自分で感心しています。このあいだのドッグ・ショーでも、ブリーダーズ・グループで2位を勝ち取りました。その前は3位。ポロニーズが上位に登場するということは、世界を見回しても今までなかったみたいです。つまり、私の犬舎の犬たちは、「ポロニーズという犬種史上の快挙を成し遂げた」と言ってもいいわけ！ 自慢ですけど（笑）。

F..そもそも、スウェーデンにはポロニーズの犬舎はいくつぐらいあるのですか？

R..5つぐらいですよ。

F..たったそれだけ!? 犬種としては知名度がないから、当然確立されていない。それで優秀な個体というのが、まだそれほど出回れない状態にある。なのに、すべての犬種のなかで、ブリーダーズ・クラス上位に入賞していくというのは、やっぱりすごい……！

R..短期間にうまくいったから、私はスウェーデンのポロニーズの関係者、それも先代からやってきていた人のあいだでは嫌われています（苦笑）。嫉妬もあるのかもしれませんね。でも、私はいろんな人に助けてもらいました。「何がいい個体なのか」というのを、勉強できる環境にいたんです。それから、たとえポロニーズ自体のブリーディング経験の年数がそれほど長くなくても、私はブリーダーとしてはもうベテランの域に入っています。いろんな犬種を扱

ってきましたから。ブリーディング全般に関するノウハウをわかっているんです。ブリーディングをするにあたって、まず何をすべきなのか。たとえば、「原産国が良しとしている正しいスタンダードを理解する」という考えにすぐに至るのも、やはりベテラン・ブリーダーだからこそ。いい犬を作るコツを知っていれば、何の犬種を扱っているかが、あまり関係ないんじゃないかしら。

F..「犬種に関係なく、正しくスタンダードを理解する」というのは、概してこういうことなんでしょうね。

R..経験によると思います。初心者のブリーダーなら、何か測量可能なものに頼ってしか犬を見ることができない。たとえば、獣医師が健康であるという診断をしたから目は問題ないとか、歯の数がそろっている、体高は正しいなど。彼らには、そこまでが限界なんです。

でも、経験者にはわかるんですよ。実際に、犬をさわって感じてみて、「何が健全な体躯構成なのか」、「スタンダードはそれをどう解釈して我々にあるべき姿を教えているのか」、「ある犬の体の特徴が、どんな風に次の世代に伝わっていくのか」ということが。そういう深い見方は、初心者には難しいでしょう。

私がブリーディングしているもう一種の犬種であるラゴットを例に出してみましよう。この犬種は突然人気が上がったために、初心者のブリーダーがたくさん出てきてし

まった。ところが、彼らの作るラゴットには、コートカラーや鼻の色が間違っていたりと、質が悪いのが多い。元来、陽気な性格の犬のだけど、攻撃的でシャイな子も出てきているんです。ラゴットもボロニーズも、愛玩犬として飼われるのですから、家族と仲良く暮らせるように、「性格がいい」という点がいちばん強調されなければいけない。でも、気質を選んで交配することができない、っていうのも、やっぱり初心者がか犯しがちなミスなんですよ。

F…レアな犬種だから情報収集をがんばったというフレデリカさんの努力。これも経験がなせる業ですね。初心者だったら、情報収集の大事さを見落とすことがあるかもしれません。

R…勝ったまま有頂天になっていられないのも、経験が教えてくれたことですね。今の代の犬は、とてもうまくいったから、「これからはさらなる新しい血を入れるとき」と、もう先のことを考えています。今度は

チェコあたりから輸入しようと思っています。

ボロニーズってどんな犬？

F…マルチーズと比べて、ボロニーズは性格的にはどんな犬なんでしょう？

R…マルチーズのことは詳しくはわからないけれど、同じようにとても社交的。そして、気質に難しさがまったくない。簡単にシンプル。デレデレと暮らしたい人と一緒にいれば、同じようにデレデレして文句は言わないし、それどころかとても幸せそうにします。また、フィットネス志向でたくさん散歩に出たいという飼い主といえれば、こんなに小さい体でも一緒に何キロでも歩きます。適応力は最高よ。

F…全般的に、小型愛玩犬は、環境の変化に物怖じしない精神的な強さがありますね。

R…この犬は、イタリアのみならず、ヨー



人間が怪しいと思えば、すぐにほえる。

F…今でもそういうところがあるのがわかります。私がフレデリカさんのお宅の台所に入ったら、みんなに果敢にほえられました。かわいいのに、頼もしい小型犬ですね！

AD
55×260